

広島俳句倶楽部

令和四年十月作品集

船坂峠

佐保 光俊

奈良・平安時代に都と九州の大宰府を結んでいた古代山陽道が、兵庫県（播磨国）から岡山県（備前国）へと越える峠が船坂峠（標高一九七メートル）である。近畿地方と中国地方を画する要所だ。船坂峠は、（史実かどうかはさておき）『太平記』により、児島高徳が隠岐に流される後醍醐天皇を奪還しようと待ち伏せした地として、世に知られている。また、今昔物語集に、峠の兵庫側に置かれた野磨駅（やまのうまや）で僧を襲おうとした毒蛇（おろち）が法華経を聞いて改心し人に生まれ変わった話が載っており、清少納言もこの話を枕草子で取り上げている。駅家跡の近くには落地（おろち）の地名が現存する。峠の岡山県側には、地元の伝承として神功皇后ゆかりの石のあるという三石明神社がある。江戸時代には宿場町だ。三石（ふついし）の今は、耐火煉瓦を作る工場の煙突が数本立ち静かな盆地の町である。

三石の穴門に吹く夏の風

三石に俄かに翳る百日紅

峠へと盆の町より上りけり

峠越す我に鳴きけり法師蟬

吉備に見て播磨に見たる雲の峰

稲の咲く播磨へと入る大路かな

道を問ふ家に散りけり百日紅

遠雷の吉備ふり返る大路かな

先ほどの墓参の人とすれ違ふ

秋蝶に導かれゆく大路かな

《作品鑑賞》

村上正人

船坂峠は近畿地方と中国地方を画する要所であり、峠を境に方言も異なる。佐保光俊先生は作品『船坂峠』で、この峠を吉備から播磨へ越える道に感じられる風情と、季節が夏から秋へと移る様子や表裏された。平明な表現の中に、事らし、季節の移ろい、歴史までもが伝わってくる作品である。

三石の穴門に吹く夏の風

旅立りのア・ナ・チ・チ・チには四列穴門があり、そのうち二列が川、一列が車道、もう一列が歩道となっており、上には山陽本線が通っている。歩道の穴門を歩いたとき吹き抜ける風はやはり「夏の風」であろう。

吉備に見て播磨に見たる雲の峰

峠を越える前に吉備側で仰ぎ見た峰。峠を越えてから播磨側で見た峰を仰ぎ見ると、今一度新鮮な心持ちで眺めることができた。国境の峠というものを感ずることができる作品である。

先ほどの墓参の人とすれ違ふ

先ほど見かけた墓参の人とすれ違うことをさりげなく書くことで、今度は吉備へと移る歩みを始めたことが窺われる。どれほどの時間が経過したのかも伝わってくる作品である。

秋蝶に導かれゆく大路かな

都と九州の大宰府を結ぶ古代山陽道の大路を秋蝶に導かれるように歩む。秋蝶は春夏の蝶と違って風に逆らわずゆるやかに飛んでいる。大路を導くのは「道をし」ではなく、「秋蝶」がふさわしいと思う。

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

備前から播磨へと古代からの道「大路（たいろ）」を、船坂峠を歩かれた。その歴史を胸に置きつつ、自然を詠まれた端正な作品である。昔の街道を歩かれる佐保光俊先生の静かな歩みに、ひととき一瞥したような心地がしてくる。

三石の穴門に吹く夏の風

三石の穴門。その年月を経た美しい形が、吹いてくる風を一層涼しく感じさせる。

峠へと盆の町より上りけり

盆の習わしや盆とはその地域により異なる。備前の盆踊盆はどのようなものなのだろうか。

吉備に見て播磨に見たる雲の峰

船坂峠を越え、播磨から雲の峰を見る。広い空、大きな雲。人の作った境界線はあっても、自然にはないのだ。

道を問ふ家に散りけり百日紅

道を聞いたその家に咲く百日紅。散り敷いた花を食べて、百日紅は美しい。

秋蝶に導かれゆく大路かな

行く道を先導するように、蝶が飛ぶ。残暑の大路を歩く先生に、小さな蝶は少なからぬ喜びをもたらしている。

《作品鑑賞》

亜矢

「船坂峠」は、十句全てが平明であり、一読して読み手を船坂峠へと誘ってくれる作品である。現地にいったことがなくとも、作者の解説と共に、千年以上続いている歴史をしみじみと感ずることができる。

峠越す我に鳴きけり法師蟬

まさに今、峠を越そうという時、法師蟬が鳴き始めた。「我」に、作者の何かが悲しみを含んだ思いがこめられているように思う。

遠雷の吉備ふり返る大路かな

兵庫県側にいた時の句であろう。この遠雷は、偶然ではなく、必然だったのでは、と勝手に思ってしまった。

秋蝶に導かれゆく大路かな

中七がとても印象的で、幻想的でもある。秋蝶は、春や夏の蝶にはない、はかなくもわたたかみのある味わいをもたらす。

佐保光俊

虫鳴いて明日から月のまた細る
有明に一羽の鳥のけたたまし

村上正人

十六夜の木星連るる明さかな
有明の月を見てより道を掃く

高尾ひとみ

十五夜や橋のたもとに二人居て
ゆつくりと十五夜の橋渡りけり

あざみ

正面に満月上がる山家かな
木の影と我が影とあり月高し

亜矢

来るはずの客の来なくて夕月夜
やや荒れし指で米研ぐ月夜かな

綾乃

電線の途切れぬ街や宵の月
月に向けドクターヘリの飛び立ちぬ

井藤希

帰り来て無月の路地の灯りかな
竹林に差し入る影や月上る

栄吉

月出でて歩み止めたる歩道橋
格子戸を開け放ちたる月夜かな

大畑恵

満月や帰りの道の足軽く
月満ちてその家の屋根照らしをり

暁子

故郷へ向かふ列車や小望月
庭草の匂ふ縁側望の月

すみれ

立待の昇つてゐたる坂の上
松の影畳に映す里の月

知佳子

連れ立ちて海を見にゆく月今宵
爪先の照らされてゐる良夜かな

ちどり

十六夜に回覧板を届けをり
十六夜が飛行機雲を横切りぬ

友岡葉山子

月の宴一句一句とはやされて
客送り門扉の前の月見かな

ふじ女

サンダルを引つ掛けたまままだ無月
見たと言う子供の声の月見かな

松田裕子

踏石に並ぶ子の足良夜なり
父の下駄履いてひとりの月見かな

宮田保江

帰り道月に守られ歩きけり
並び居て満月見たる逝きし兄

森口良樹

保津川の水面に揺れて望の月
ポケットの携帯の鳴り望の月

金川昭子

十五夜の月の出を待つ風呂あがり

上島康子

十五夜やジンをグラスに注ぎをり

河原静子

満月の雲に隠れてしまひけり

紀英子

名月や御堂の映る庭の砂

熊谷ゆり子

月明や街の傷跡見えはしまひか

桑門わかこ

地下街を出て待宵を歩きけり

高嶋絹代

十三夜木椅子に母と語り合ふ

高梨英子

ぐづる子を満月の夜にあやしをり

民

立待や一等星をかたはらに

辻純江

赤ワイン夫と二人の良夜なり

津田玲子

後の月静かな時を楽しめり

中野明美

月見れば吸ひ込まるるや我が悩み

撫子

立待や洋菓子店の開いてをり

みさ子

月明や犬を散歩の家族連れ

美耶

名月やくつきり見ゆる安芸小富士

村上理江

海原に砂金を落とす今日の月

やす保

活字進ふ目を転じたり後の月

山崎桂子

夜遅く月見団子を夫と分く

山野ウタ

広縁に座布団並べ月を待つ

大路ゆく我を飛び越え稲雀

山裾をゆけば大路の秋蚊くる

鶏頭や大路を行けば小雨降り

このあたり駅家の跡と柿赤し

風に乗り閻魔蟋蟀聞こえる

戦ひも響応も秋空の下

柿の実や古き町へと帰る人

兄妹の語つてゐたり萩の前

古き寺古き社に野分かな

鬼ノ城にやがて行き着く野分かな

見渡せる地に稔りあり天高し

植ゑずとも秋海棠の咲く庭よ

駅降りてバスを待つ間の小望月

天窓に見えゐる星と十六夜と

思案するやうにも見えていばむしり

開きたるドアの触れたる藤袴

去ぬ燕並ぶ薨を見上げたる

背戸山の杉の匂へる野分あと

散り落ちし実紫掃く朝かな

庭仕事精出し釣瓶落しかな

花芙蓉川辺の家の静まりて

道端の石に腰かけつくつくし

稲の花駅への道に風吹いて

止んだかと思へば降つて秋の雨

颱風や静かに本を読んでをり

ベランダに雀来てゐる野分かな

子を抱いて秋の川辺に虫を聞く

とんぼうの群れたる道をお城まで

秋の蝶花ごとゆれて蜜を吸ふ

家に着く頃には隠れ小望月

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

コスモスを抱ふる人とすれ違ふ
立ち並ぶ煙突照らす今日の月
満月に抱き上ぐる子の手を振つて
窓開けて光差し込む今日の月
宮島の嶺に上がりし今日の月
仕舞湯の窓に差し込む望の月
十六夜の月見る車に座りけり
家路へと付き来る月を振り返る
昼の月ほのかに見えて紅葉山
最終の船笛聞こゆ星月夜

あざみ

公園の木の実を踏んでバスを待つ
すっぽんに見られてゐたる秋暑かな
水槽のすっぽんもかく秋日濃し
すっぽんの首伸び縮み秋の雲
近づけば動くすっぽん秋日和
秋の風桜大樹を見上げたる
秋日傘団ちて聞きたる風の音
蝶々の秋の時雨を飛びゆけり
系瓜忌や窓開けて聞く雨の音
次々と電話のかかる暮の秋

亜矢

白寿なる祖父の眉間や敗戦忌
句会終へなほも眩しき今日の月
君の待つ月の従業員出口
稟議書の通りうれしき月夜かな
月光の千畳閣に胡坐かく
母らしき自問自答す秋の富士
床につく義父と語れる子規忌かな
厨にて濯ぐ我が手や汀女の忌
たはむれにすすき折り取る蛇笏の忌
子の噛みし乳房の痛み冬の朝

綾乃

秋の蟬墓地への道に聞きにけり

飛び来たる飛蝗の顔を見てをりぬ

岩端の爽籟に身をゆだねたる

見下ろせる音戸の瀬戸の律の風

客送り玄関先にちちろ聞く

庭園の地に倒れたる鶏頭花

月照るや一灯もなき工場跡

川沿ひに帰る燕の早きかな

彼岸花ひたすら揺るる川向う

銀漢や自転車押して帰りたる

休日は鶴の遊べる保育園

稲粟が土塀を越ゆる農家かな

花芒訪ふ人のなきドッグラン

柿の実のたわわに生りて村外れ

島人に月の名所を尋ねたり

月を見てすぐに立ち去る港かな

秋の潮今日で終りの一人旅

瀬戸の島土産にもらふ青蜜柑

宵闇や窓用めて読む同人誌

扁額に師の名前あり秋祭

庭先に茗荷の花の五つ六つ

滔々と濁流ながれ野分あと

鰯雲遠くの子等を思ひをり

杜鵑草今年は遅く咲きにけり

秋の薔薇ほのかに香る窓に立つ

曼殊沙華いつもの朝の道を行く

友を訪ふ道にコスモス揺れてをり

故郷に帰れば山の粧ひぬ

秋冷や日向の国の酒を酌む

今はただ菊芋の咲く庭となり

井藤希

栄吉

大畑恵

カップルの足跡さらふ秋の波

コスモスの咲いて水音近き家

倒木の水漬きてゐたり秋の沼

穂芒や山道こころ狭まりて

丁寧に通草の蔓を引いてをり

山からの水に鯉飼ふ薄紅葉

実石榴や姉は長きに家を空け

子ら去んでよりの夜長の雨の音

頬を吹く風の湿りて十三夜

十三夜ばらばら捲る旅の本

暁子

一片の雲なき御空秋夕焼

颯風に今夜も息子泊りたる

野分晴掃きながら見る光る雲

叢雲をたちまち出でし小望月

十六夜の窓辺に座る二人かな

秋の朝差し込む日矢に手をかざす

庭に植ゑる里の檀に実の付いて

待ち合はす居酒屋照らし後の月

我が窓に星連れ昇る後の月

草の穂でくすぐり通る童かな

すみれ

また元の土に置きたり櫟の実

隙間より畳に差せる秋の月

少しだけ戸を開けて見る後の月

木犀の前でしばらく話しをり

鵲鳴いて鴉も鳴いて夕オル干す

デッキへと手を振り返す秋日和

大杉に手を当ててみる鵲日和

苔の間を走る秋水手を浸す

木犀の匂ふ牧舎へ牛帰る

牛の踏む跡に散りたる紅葉かな

知佳子

夜の明けて峡の故郷霧の中

コスモスが休耕田の一面に

義理の兄松茸置いて帰りけり

唐辛子車を止めて買ひにけり

隣から松の手入の音聞こゆ

木犀の香の漂へる団地かな

京都から子の帰りけり金木犀

冬瓜が母の畑にごろごろと

診察を終へし母送る秋の空

新しき神殿に舞ふ里神楽

マスクット両手に握り一歳児

留守宅に今年も付けて式部の実

家事を終へ一息つくや今日の月

病室で知り合ふ人と月眺む

瀬戸内の波たぶたぶと月明り

雲を出で夫と吾の影後の月

新米におかずは要らぬと夫の言ふ

横川に魔女も出るらしハロウィーン

秋の声姉の遺せる手紙かな

山々の稜線の濃く秋深む

苦戦して剪定したる後のお茶

まだ青き柿の実の下通り過ぐ

皮に刃を当てれば梨の汁流る

白よりも深紅でこそ彼岸花

種を取る風船葛プ子と押し

秋の雲芸術展の如くなり

七輪で秋刀魚焼きゐる隣かな

半焦げの秋刀魚の味を好みたる

山盛りの栗を皆に分けてをり

帰省子に急ぎ栗飯炊きにけり

ちどり

友岡崇山子

雲雀

秋の蚊や引つ張り伸ばし道着干す

古い名のついた野球の紫山子かな

秋祭高校生となりし子ら

秋晴にパラレルになる飛行機雲

通過の電車全身に秋の風

爽やかに見知らぬ色の新幹線

秋雨に迷う横丁緑り返す

大階段見上げる無音秋の声

ピンヒール並ぶウインドウ文化の日

展望の細長きビル震災忌

ふじ女

水遣りのシャワーをくぐり夏の蝶

手のひらに日の温みあり椿の実

病室に色とりどりの秋の草

叔母を訪ふ帰りの釣瓶落しかな

秋の夜を寢息聞くまで妹に添ふ

十六夜は二つの星の真ん中に

ここからは花野となりて八令目

カルデラの風の集まる芒原

ゆつくりと閑節を折り鹿座る

初産の吾子に寄り添ふ夜長かな

松田裕子

星涼し最終バスを待ちをれば

朝練に走る高原蕎麦咲いて

こばれ萩施設の母は生家恋ふ

表札は父の名のまま魂迎

秋澄むや新聞届く音のして

月代やウインチ唸る牡蠣筏

畑に背を伸ばせば鴈の鳴きにけり

秋高し手形を持つて湯を巡る

秋深し暮色に畝の影の濃く

引き寄せて匂うて浸かる柚子湯かな

森口良樹

木曾をゆく電車の揺れや蕎麦の花

穂芒やくつきり見ゆる槍ヶ岳

芒原引かれて飛べるグライダー

吾亦紅少し風吹く道に出て

さり気なき川の流れや曼殊沙華

木の間より満月見ゆる山の家

子等も見て写真で月を送り今ふ

蟋蟀やすこし熱めの湯に浸り

弦月や眠らぬ街に暮らしをり

俯けど日はまだ高し法師蟬

爪を切る音の軽やか鶏頭花

水遣りの腰を伸ばせば秋夕焼

よく染みたがめ煮頬張り月を待つ

一日を終へて名月賜りぬ

秋灯やパズル一片見つからぬ

花魁の櫛かんざしよ曼殊沙華

枝燃やす炎見てゐる野分あと

西へ行く飛行機雲や花芒

磐石の根元に咲いて曼殊沙華

稽田に山鳩の来て登校す

石組にわが影落とし歎進ふ

一歩づつ女坂来て秋の声

海に向くなだらかな坂草紅葉

生垣を横へ横へと秋の蝶

秋の蚊の寄り来る脛の細きかな

秋深き棚田を風の渡りけり

北の山雲の掛かりて秋時雨

辻純江

村上理江

山野ウタ

盆の月貨物列車の長き音

子の通ふ学び舎照らす月明り

歩を早め急ぐ家路や十三夜

朱の器残る古墳や星月夜

門前の骨董市や秋日和

パドックを回る駿馬や天高し

寺町の暮れかかりをり花芙蓉

寺町に吾と芙蓉の暮れ残る

庭仕事母は草の実疎みけり

木犀の散り敷いてゐる庭を踏む

鳴き交す鶉の聞こゆる厨かな

秋爽の空に御堂を開け放つ

風吹いて稲の匂に里思ふ

ざくざくと稲を刈りゆく祖母の鎌

コスモスの揺れれば母の恋しくて

秋の朝畑焼く煙に母思ふ

秋深し肌で感じる雨上り

食卓にホットミルクの湯気の立つ

熊谷ゆり子

桑門わかこ

中野明美

泣き止まぬ赤子に見せる金魚かな

焼茄子へちりちり沈む鯉節

新涼や川に魚の跳ねてをり

捨て網の傍におしろい咲いてをり

秋の蝶もつれて垣根越えにけり

秋沙

オリーブの実の色付きし散歩道

栗見つけ墓前に供ふ秋彼岸

風吹いてコスモスの花すこし揺れ

公園でどんぐり拾ふ子らの声

秋高し飛行機雲がどこまでも

金川昭子

月を待つ団子の形整へて

三色の団子並べて月見かな

坊守の秋の七草薨に挿し

学校を避難場所とし彼岸花

椿の実屋根打つ里の一夜かな

高梨英子

花火師ら整列をして点火待つ

品定めして買ふ瀬戸の青レモン

望月の上に木星光りをり

中天の雲にまぎれて十六夜

帰路につく東の空に後の月

民

秋うらら雲なき空に鳥の声

酒蔵の煙突見えて秋高し

山の端の色濃くなりぬ秋夕焼

瀬戸内の牡蠣の水揚げ秋の朝

上島康子

鮮烈なダリア一本甕に生く

木犀の触れば散りぬオレンジに

石榴生け石榴を飾り楽しみぬ

この道は車も通らぬ秋の暮

紀英子

秋高し牟寿の母の髪白く

秋日濃し母はやさしき人なりき

温め酒息子の帰宅待つてより

銀杏の朝のラッシュに踏まれたる

撫子

古寺の庭に置きたる景鶏頭

寺の門くぐつた光の大き菊

野路の秋無人の駅に猫の居て

静まりてひとり眺むる海の月

美耶

昼花火つづけて上がり天高し

花野道通りて天へ行かれしか

束の間を雲の途切るる後の月

高嶋彌代

朝顔の蔓を外すにまた咲いて

かけつこの園児の声や秋高し

空高しリュックを背負ふ人多く

みさ子

潮満つる川に沿うたる秋日和

虫の声聞きつつ葉切る夕べかな

ゴンドラに眺むる城や秋高し

やす保

芒原抜けて着きたる登山口

竜胆や石ころ多き深入山

頂上の人の見えたり秋うらら

山崎桂子

秋晴や遠く園児の声聞こゆ

朝寒やのろのろ一日始まりぬ

幹

鰯焼く一人暮らしの煙かな

阿波久

コロナ禍で中止となりし秋祭

津田玲子

令和四年九月度作品集より

大畑恵 私の選んだ十句

柿の木にこれが最後と鳴く蟬か	佐保光俊
藪蘭の風に任せて揺れてをり	村上正人
山水に祖母の冷やせる甜瓜	高尾ひとみ
山霧や神話の国になほも濃く	綾乃
幼な子の母を呼ぶ声秋入日	栄吉
父と子の将棋指す音盆の夜	暁子
開け放つ生家の居間にやんま来る	すみれ
新聞のことりと届き朝の月	知佳子
仙人掌の花咲く頃は父想ふ	雲雀
山寺の樹下に見上げて金鈴子	森口良樹

村上正人 私の選んだ十句

夾竹桃人の生死に散りにけり	佐保光俊
虫の音のかそけきに耳澄ましをり	高尾ひとみ
秋草に沈んでゐたり眠り猫	綾乃
島々を近くに置いて夏逝きぬ	井藤希
背戸山に栗落つる音聞こえけり	大畑恵
萩の前車椅子より立ち上がる	すみれ
秋の灯や姉の形見の指輪はめ	友岡案山子
連れ添うて桜紅葉の中に居る	森口良樹
初めての紅をさす子や地藏盆	村上理江
葉鶏頭雨まつすぐに降つてをり	桑門わかこ